

# 「自然の内部に、被造物の精神は踏み込まない」

—— A. v. ハラーにおける境界/限界の諸相

宮田 眞治

アルブレヒト・フォン・ハラー (Albrecht von Haller, 1708-1777) は、近代生理学・解剖学・植物学史上に消えることのない足跡を残した自然科学者であると同時に、近代ドイツ語圏文学の黎明期にあつて、後世に大きな影響を与えるいくつもの作品を生み出した詩人でもあった。「近代が以後許容することのなかったタイプの万能学者 (Universalgelehrte)<sup>1</sup>」とも呼ばれるその多彩な活動は、同時に人間の知と存在における境界と限界についての強い意識を伴うものだった。生と死という問題をめぐって、その意識は先鋭化する。詩においても、学問の主題としても、そして実存的にも、「生と死」は終生ハラーの意識の中心を占めていたと言っている。

本論考では、第1章で教示詩 (Lehrgedicht)<sup>2</sup> 作者としてのハラーを、第2章では生理学者としてのハラーを中心に論じる。第3章で、生と死を主題としたもののうち、最も個人的な、そして教示詩というジャンルのいわば限界につきあたった詩を、それぞれ一篇取り上げる。最終章では、境界/限界をめぐるハラーの営みがどのように受容されたか、いくつかの例をもとに検討する。

まず、その生涯を簡単に振り返っておきたい。<sup>3</sup> 1708年ベルンに生まれたハラーは、1725年よりライデンのブルハーフェのもとで学び、1727年に学位を取得、イギリスとフランスで研鑽をつんでのち、バーゼル大学を経て、1729年にベルンで開業するが、この年、前年の調査旅行の経験をも

とにした詩「アルプスの山々」*Alpen* が成立している。1732年には詩集『スイス詩の試み』*Versuch Schweizerischer Gedichten*[sic] が匿名で刊行され、1734年の増補改訂第2版からは著者名が付された。その後も増補・改訂作業は執拗に繰り返され、最後の第11版は1777年（没年）の出版である。1736年、新設のゲッティンゲン大学より解剖学・外科学・植物学の教授として招聘され、学者としての活動が本格的に始動する。ゲッティンゲンに植物園を創設し、「ゲッティンゲン学術新聞」*Göttingischen Zeitungen von gelehrten Sachen* の編集長を務め（1748-1753）、王立学術協会（のちのアカデミー）を設立する（1751）。新設のゲッティンゲン大学がヨーロッパでも有数の大学としてその声望を急速に確立するにあたってハラーの果たした役割は決定的なものであった。その間、数多くの論文や書評と並んで、ブールハーフェの『医学指針』*Institutiones medicae*（1708）の注釈書全7巻（1739-1744）、最初の生理学教科書『生理学初歩』（以下『初歩』と略記）*Primaе lineae physilogiae*（1747）を刊行。1753年に発表された『人体の感覚的部位および刺激感応的部位について』*De partibus corporis humani sensilibus et irritabilibus* において、緻密で計画的な動物生体解剖に基づいて提示された〈刺激感応性－感覚性〉という対概念は、ヨーロッパ全土に大きな知的興奮と論争を引き起こし、その後の生理学の発展に大きな影響を及ぼすこととなる。1753年にゲッティンゲンを去り故郷ベルンに戻ってのちも、決して恵まれたとは言えない公人としての活動と共に学術活動は精力的に続けられた。生理学上の主著『人体生理学綱要』（以下『綱要』と略記）*Elementa physilogiae corporis humani*（1757-1766）の刊行、植物学研究の再開、膨大な文献目録の作成のみならず、晩年には3冊の政治小説（『ウーゾング』*Usong*（1771）<sup>4</sup>、『アルフレート』*Alfred*（1773）、『ファビウスとカトー』*Fabius und Cato*（1774））やキリスト教に関する論考（『啓示の最も重要な真理についての書簡』*Briefe über die wichtigsten Wahrheiten der Offenbarung*（1772）、『啓示に対する、存命中の自由思想家によるいくつかの論難についての書簡』*Briefe über einige Einwürfe nochlebender Freygeister wider die Offenbarung*（1775-1777））も残している。

輝かしいキャリアの陰で、彼の人生には病と死が執拗な、そして時にはそ

の実存を脅かすような力を及ぼし続けていた。若年から病弱であった彼は、1731年にマリアンネと結婚するが、ゲッティンゲンに到着2週間後の1736年10月31日にそのマリアンネが死亡。1739年に再婚した妻エリーザベートも翌年に亡くなる（三人目の妻ゾフィーはハラーよりも長く1795年まで生きた）。後半生においては抑鬱状態に苦しめられ、最晩年、病からなる苦痛を和らげるために常用した阿片に対し依存状態に陥った。

1777年、生前最後の改訂版になる『スイス詩の試み』第11版の序文に、ハラーはこう書いていた：「魂が身体の分解という悲しい感覚に煩わされているとき、気の抜けた表現やぎこちない音節、中途半端に正しい押韻といったものは、もはやそれほどの欠陥とは言えず、自らに残されたわずかな時間を、若き日の仕事を修正するために費やそうとは思わない。永遠は魂の前に、その無限性という眩暈のするような観念を突き出している。永遠の縁を歩む者にとって、この永遠こそが心にかける唯一つのことなのは正当なことである<sup>5</sup>。臨終の場では、自らの心臓の最後の鼓動について、こう語ったと伝えられている：「打っている、打っている——もう打っていない」。

## 1.

ドイツ語圏文学の歴史にハラーが登場するのは、アルプスの自然に美を見出し、それを詩という形式のうちに描き出した詩人としてである。詩篇「アルプスの山々」*Alpen*<sup>6</sup>は、アルプスの植物調査旅行という経験を基にしているだけでなく、たとえば都市と自然の対比はウェルギリウスの『農耕詩』*Georgica*に範をとっているというように、そこにはさまざまな文学的影響の存在が指摘されている<sup>7</sup>。なかでもブロッケス (B. H. Brockes, 1680-1747) の全9巻におよぶ『神における地上の喜び』*Irdisches Vergnügen in Gott*<sup>8</sup> (1721-1748) は大きな位置を占める。自然の精妙な構造とその多様性における秩序を歌うことで、その〈作り手〉である神を称えるというあり方は、「自然神学」(Physico-Theologie) という啓蒙期の思潮<sup>9</sup>における最も豊かな文学的結実であるといえるが、ハラーの詩もこの系譜のうちに位置づける

ことができる。感覚による経験を通じて感覚を超えるものの把握へという想像力の発動のプログラムがここでも踏襲されているといっている。たとえば、次のような一節がある。

あちらには高貴なりンドウが、／雑草の群れを超えて高くその身を伸ばしている。／花の民すべてがその旗のもとに仕え、／青色の兄弟すら、その身をかがめ、敬意を表する。／花々の明るい金色は放射するように曲がりつつ／茎の上に積み重なり、その灰色の衣を冠で飾る。／葉のなめらかな白色には深い緑の筋が走り、／濡れたダイヤモンドの色とりどりの光がそこを輝かせる。／これほど公正な掟があろうか！ 力と装いが夫婦となり、／美しい身体に美しい魂が宿るのだ (V.381-390, S.49-50, [S.18])

ここでは、雑草の中のリンドウという図像から王のイメージが導かれ、力と装いの結びつき、美を媒介とする心身の結合という抽象的概念へと展開されていく。<sup>10</sup>

レッシング (1729-1781) は『ラオコオン』*Laokoon* (1766) 第 17 章において、言語によって喚起される想像力を通じて空間的イメージを鮮明に描き出すことを目指すいわゆる「詩的絵画」という理念を批判する。そこで例に挙げられるのが、先に引用した箇所と、それに続く一節である。視覚においては一望のもとに与えられる全体を、継起的記号である言語によって喚起される想像力は、可能な限り速く通覧し、記憶を動員しつつ一つの全体としてまとめ上げねばならない。しかし、この詩句に認められるのは「あらゆる現前化 (Täuschung)<sup>11</sup> を排除した描き方」であり、「花々の明るい金色は (……)」という詩句の「どの言葉からも、仕事をしている詩人の声は聞こえる。しかし物そのものの姿が見えるというにはほどとおい<sup>12</sup>」と論を進め、レッシングは視覚的な現前化の喚起力を完全に否定する。<sup>13</sup>

ハラーは、『ラオコオン』に対する書評のなかで、レッシングはこうした詩的絵画において本来目指されていたものを取り逃がしている、と反論する。

そこで意図されていたのは、「植物のいくつかの注目すべき特性を知らしめる」ことであり、それは詩人のほうが画家よりもうまくなしう。なぜなら詩人は「視覚以外の感官を通じて認識され、実験によって発見されるが、画家には近づきえない（……）内部に潜む特性」をも表現することができるからである。ここで実験に言及されるのは興味深い。科学における〈外部／内部〉という問題——これについては本章の後半で検討する——が言語芸術作品の表現可能性という問題と結びつけられているのだ。

外部／内部という区別は、詩の語りの動的な持続を支える、いわば空間モデルとしても機能する。たとえば、弁論論的な問題を取り扱った、全3巻606行からなる長編詩「悪の起源について」*Über den Ursprung des Übels* (1734)では、冒頭の「穏やかな流れが泉から湧いている／あの静かな高みで、優しい夕風に誘われ、／わたしは小さな森のなかにたたずんでいた」(I.V.1-4, S.162, [S.53])に始まり、60行にわたり、足元に広がる風景が詳細に描写される。それは「そう、わたしが目にしているものすべては運命の賜物なのだ！／世界はそこに住まうものの幸福のために作られ、／繁栄が自然にあまねく魂を吹き込み、／そして万物が、最高善の痕跡を持っている！」(I.V.61-64, S.165, [S.55])というオプティミズムの断言に至る。しかし、ここから新たな想念の運動が始まる。穏やかな風景の孤独のなかで「わたし」の中に浮かぶさまざまな観念が「次第にむすびつき、わたしの惑乱した思いは／自らに反して」(I.V.69-70, S.166, [S.56])次のような言葉へと結実する：「そしてこれが、賢者たちが嘆く世界なのだ、／牢獄となり、愚か者たちが骨折る世界なのだ！」(I.V.71-72, S.166, [S.56])このオプティミズムとペシミズムの対立が、詩の全体をある固定した観念ないし教義の伝達ではなく、回答を求める探求の歩みの記述としている。外部／内部という対立項が、ここで二つの世界観と結びつく（「我々の苦難の舞台が、隠されていた姿を現し始める。／わたしには内なる世界が見える。それは地獄のよう」(I.V.76-77, S.166, [S.56])）。以下、この二つの世界を経巡りながら、人間のさまざまな営みが観照され、詠嘆され、その意義が問われ、世界における悪の實在の理由を問う思索と詩作が展開されるのである。

このような書法はハラーという一詩人の個性に帰せられるのみならず、ジャンル論的にも考察されねばならない。教示詩（Lehrgedicht）というジャンルは、啓蒙期における文学のステータスの独自性を体現するものだった。この時期に開かれたさまざまな知的領域——ある研究書を引用すれば、<sup>15</sup>「経験的学問の地位確立、自然権という新鮮な思想、政治行政と一般経済学および特殊経済学における新たな諸原理、近代的な神学および哲学的諸傾向、心理学上のさまざまな発見」<sup>16</sup>が、文学の新たな題材となった。そこでは、諸学によって発見された真理をいかに表現し、一つの全体として構成するかが詩学上最も重要な問題となる。そこでの大原則は「有益であり、楽しませる」（prodesse et delectare）という古代ローマ以来のものだが、読者の注意をひきつけておくということが極めて重要な位置を占める。一般的真理を具体的に事例化し、抽象的真理を感性化する比喩を多用したり、読者の〈魂〉に働きかけるために〈知性〉を納得させるための議論を展開したりするなど、レトリックの伝統を継承した独自の詩法が展開されることになった。<sup>17</sup>ハラーはそのような場で自己形成した、というよりも彼自身がそのパイオニアであった。

ハラーが『スイス詩の試み』第4版に付した序文は、文学伝統に対する彼の自己定位、同時代の思潮との関係、そして当時の詩学を踏まえた彼独自の詩法について自己規定を含んでいるという点で極めて重要なドキュメントである。

そのうちにわたしはイギリスの詩人たち〔ポーブラを指す〕に親しみ、彼らから思索への愛と重厚な詩への偏愛を取り入れた。その偉大さに驚嘆させられた哲学的詩人たちは、はかない泡の上のようにメタファーの上を泳ぐ、膨らんで仰々しいローエンシュタインの態度をわたしから払拭した。こうして新たな種類の詩作が生まれたが、それは多くのドイツ人の不興を買うという不幸を味わった。しかしわたしは少しも後悔していない。むしろ、もっと多くの思索をより少ない詩行のうちに織り込めればよかったくらいである。思うに、読者の注意力はけっして衰えさせて

はならない。思考すべきものが見出されないような弛緩した数行が読者の前に出されると、あきらかに機械的にそうした事態が生じる。詩人たるものは、イメージや、生き生きとした比喩形象、短い箴言、力強い筆致や思いもよらない注釈をつぎからつぎへと積み重ねねばならない。でなければ読者から放り出される覚悟がいる。<sup>18</sup>

単に「積み重ねる」だけでなく、それらは一つの探求の課程として組織化されねばならない。読者には、思考の結果を受容するというよりも、むしろ詩句を触媒として自ら思考し、探求者としての自己をシミュレートすることが求められる。語る主体が教示詩において語りのパースペクティブを切り開いてゆくプロセスと、知的探求の主体が未知の現象界を切り開いてゆくプロセスは、いわば相同的である。教示詩とは、語りの場が切り開かれ、さまざまなパースペクティブ、解像度から問題へと迫っていくプロセスを読み手に体験させることで、知そのものが開示されていくプロセスと相同的な体験を生み出すべきものとして構想されている。<sup>19</sup> その過程において、外部と内部という二分法は探求の空間モデルとして大きな役割を演じるのである。

外と内は、ハラーにおいて知的探求のプロセスと限界を表現するモデルでもあった。『ビューフォン博物誌』ドイツ語訳第1巻の序文の言葉を借りれば、自然は顕微鏡や解剖刀などさまざまな器具を用いて「剥き出しにする」<sup>20</sup> (Entblössung) べきものだった。しかし同時に、いまだ自然の多くは隠されたままである（「さまざまな物体の原初的構成要素は完全に隠されている。物質を構成する、諸元素からなる第一の粒子や、重力・弾力・電気や磁気、光や火といった根源力は、ただあちらこちらで断片的かつ不完全に知られているにすぎない」<sup>21</sup>）。

詩「人間の美徳の過ち」*Die Falschheit menschlicher Tugenden* (1730) の数節において、こうした知的探求精神がいわばドラマ化されている。「あそこに独り、思索しつつ、／はねつけられたまなざしをおずおずと地へ向けている賢者は何者か」(V.229-230, S.103, [S.48]) と詩のなかに登場させられる人物は、現世における無の自覚（「彼はこの世にとって存在せず、この世は彼にとつ



て何ものでもない / (……) / 彼は自己の無であることを知っている」(V.234, 240, S.103, [S.48]) から宇宙の探求へと向かう(「探求する思索の深い夢想到に沈潜し、/ その崇高なる精神は人間の限界を抜け出て飛翔する」(V.255-256, S.104, [S.49])). 彼に帰せられる知が、微分法(「いかにして、無限の隠れた数列を用いて、/ 傾きを変えていく線によって編まれる一本の曲線が正しく測られうるのか」(V.261-262, S.105, [S.49])), 天体運動(「なぜ星々は自らの軌道を守るのか」(V.263, S.105, [S.49])), そして白色光線の分解(「いかにして明るい光線が分解し、さまざまな色となるのか」(V.264, S.105, [S.49])) であることから明らかなように、この人物とはニュートンをモデルとしている。彼による知的達成を列挙し称えたうえで、詩の語り手はさらなる教えを乞うのだが、そこでは次のようにその課題が限定される。「求めたまえ、人工的な図形からなる設計図のうちに、/ 数字の術の光のもとで、真理のおぼろな痕跡を；/ 自然の内部に、被造物の精神は踏み込まない。/ あまりある喜びだ、その外殻だけでも自然が見せてくれるなら！」(V.287-290, S.106, [S.50])。G. ベーメはこの箇所に関して「ニュートンがなしたような、現象への賢明なる自己限定は、ここでは人間の認識能力の必然的な制限と理解されている<sup>22</sup>」としつつ、そこに「近代自然科学に対する方法論的意識を伴いつつも懐疑的な評価<sup>23</sup>」を見出している。しかし「認識能力の制限」への意識が必ずしも「懐疑」を生み出すとは言えないだろう。むしろハラーにおいて、こうした自己限定と、その制約内でのさらなる認識可能性への確信は切り離せないものとしてある(この点については次章で論じる)。

弁神論的探求におけるペシミズムとオプティミズム、そして知的探求精神における二つの契機としての限界の意識と可能性の意識、これらを集約するように、彼はある詩において人間をこう定義している：「天使と獣の、呪われた中間物 (Mittel-Ding)」(V.27, S.60, [S.24])<sup>24</sup>。

## 2.

人間は中間物である。この中間性は存在の階梯における天使と獣それぞれ



との隔たりとして把握されると同時に、また両者の併存という二重性ともみなされる。この二重性が時間のうちに展開されると、〈衰滅へと定められた身体－永続する魂〉の二元論となる。外と内の二分法は、語りの場を切り開くものであった。そのダイナミズムが、心身の二元論という形でいかに表現されることとなるか、それを確認するためには生理学の領域へ踏み込まねばならない。

テルナーの整理によれば、ハラーの生理学全体は、一つの図式に従って構成されている。まず、生体の各器官の 1) 構造と機能の描写と分析：これは、外観や生体における位置の描写にはじまり、解剖刀と顕微鏡を用いた微細構造の描写、そして化学的分析へと進む。内部構造と運動の分析は、所与の複合的現象から出発し、経験として確保可能な限界まで部分構造と基本運動を探究していく。この分析が限界に至ったとき、2) 構造による機能の説明へと移行する。器官の構造がいかに機能と調和しているか、そして構造がいかに内적および外的運動を可能にしているか、が説明されることとなる<sup>25</sup>。この図式に基づいて、1747 年の『初歩』から、77 年（没年）の『綱要』最終版にいたるまで、全体は変更されることなく次の順序で叙述されていく：機械としての生体を 1) 〈生きたもの〉とする内部運動にかかわるもの（血液循環、心臓、呼吸）、2) 動物的生命の徴表を与える感覚と運動にかかわるもの（神経と脳、筋肉運動）、3) 生体の維持にかかわるもの（食物摂取、消化、排泄）、4) 種を維持するもの（生殖器官、生殖<sup>26</sup>）。この全体構想における核心部を問題とするには、やはり彼の最も有名な研究を出発点とするべきだろう。

『人体における感覚的部位と刺激感応的部位について』*Von den empfindlichen und reizbaren Theilen des menschlichen Körpers* (1752)<sup>27</sup> は近代生理学上の古典として科学史に登録されている。その独自性は、従来の理論に対する批判的距離によって測られねばならない。刺激感応性という概念は 17 世紀半ば、フランシス・グリソン (Francis Glisson, 1597-1677) によって作られたと考えられているが、金森によれば、グリソンは「過激な物活論者であり、(……) 彼の議論は総じて実験的基盤から出発しているというよりは、理論的で演繹的な構築物であった<sup>28</sup>」<sup>28</sup>。それに対し、ハラーがあくまで実験に基づいてこ

の概念を確定しようとしたことは、次節で確認するとおりである。シュタールに関してはどうか。マンツォリーニは、シュタールにおける〈魂〉概念について次のように整理している。すべての有機的物体が腐敗するという事実に基づき、シュタールは相対的に安定した無機的物体と、異質な諸要素からなるきわめて不安定な有機的物体を区別する。そして有機的物体を分解から守り、運動能力を与える非物質的な生命原理を〈魂〉と名付けた。知性を有し、身体活動を目標づけ、成長を制御し、腐敗から守るこの原理が運動と結びつけられることは大きな意味を持つ。「運動に非物質的本性を付与し、魂と身体を媒介するものとみなすことにより、シュタールは思惟と延長というデカルト的二元論を克服したと確信していた。彼にとって生きた人間身体とは、異質な物質からなる諸部分が魂という生きた運動へ駆動され調整されているような統一体であった<sup>29</sup>」。刺激感応性に関するハラーのテーゼはこれを全面的に否定する。

「人間の身体において、外部からの接触によって収縮する部位を、わたしは刺激感応的<sup>30</sup>と名付ける：軽微の接触によってそうなる部位は、刺激感応性が強く、より強い原因をもってはじめて収縮する部位は刺激感応性が弱い。/ 接触を受けたということが魂に表象される部位を、わたしは感覚的<sup>31</sup>と名付ける：魂について我々が多くを認識できない動物においては、刺激されたとき、その動物が苦痛ないし不快の明らかな徴表を与える部位を、わたしは感覚的<sup>30</sup>と名付ける」という定義に続いて、第1部では主として感覚性が、第2部では刺激感応性が対象とされる。第1部では、緻密な実験プランに基づいて感覚的な部位と非感覚的な部位を区別するなかで、感覚的な部位とは神経そのものおよび神経を多く備えた部位であり、これらの部位も、そこに走る神経が圧迫・結索・切断された場合には感覚性を失うという結論が導かれる。第2部では、刺激感応性は「魂と意志に依存してはならず（……）筋肉のあらゆる力が神経に依存しているわけでもない<sup>32</sup>」と結論される。後者の結論は、神経を結索ないし切断した後でも筋繊維は刺激に感応して収縮するという事実から導かれるが、魂への非依存性が結論づけられるのはどのようにしてか。ハラーは、魂を「自己を意識し、自らに自己の身体を表象し、身体

の助けを借りて世界を表象するもの<sup>33</sup>」と定義する。わたしがわたしであるのは、わたしが自己の身体の変化を知覚するゆえである。ところで、わたしから切断された指や筋肉は、わたしに対してもはや変化の知覚を与えることはない。したがって「これらの断ち切られた指、搔き取られた筋肉には、わたしの魂は、その一部さえも宿ってはいない<sup>34</sup>」。一方、「指が切断されたとしても、わたしの魂の諸力は少しも失われてはいない。しかし、わたしの意志はこの指に作用することはもはやできない。でありながら、この指は刺激感応的であり続ける<sup>35</sup>」。こうして上記の結論に導かれることとなる。

動物繊維における〈死んだ力〉としての弾性に、生体組織独自の「生きた力 (vires vivae)」としての刺激感応性・感覚性を対置する——ただし刺激感応性は「生命力 (vis vitalis)」ではなく、筋繊維に「植えつけられた力」「固有の力」と呼ばれる<sup>36</sup>——にあたり、ハラーがこの「生きた力」の源泉へ遡及することはなく、その実在を確証できればよいとしている点は確認しておかねばならない。そのさいハラーが強調するのは、この二つの力相互の還元不可能性である。感覚性が魂と切り離すことができないのに対して、刺激感応性という概念は魂を排除することによって成立している<sup>37</sup>。その大前提となっているのが、魂の不可分性である。〈身体から切除された筋肉がなおも収縮するという事実のうちに魂の作用を見ようとするシュタール流の考え（具体的に言及されるのはホイットである）は、魂の可分性を前提とせざるを得ない〉ということ自体が、その論を反証する論拠として挙げられることからそれは明らかである。ハラーの論は、運動という観点からアニミズム的に身体と魂を結びつける思考に反対し、身体の自律的運動性を確言することによって、魂の自立性をも確言するという意義を帯びている。

身体と魂の接点に関する二元性の承認と理論的禁欲を最も明確に示しているのが『初歩』556節における知覚論である。そこでは、感覚器官に対する外的作用によって神経内部の流体に変化が生じ、この変化が脳内の共通感覚器官に伝達されると、この変化に対応して魂のうちに新たな観念が生まれるとされる。ここで生まれる観念は、感覚する神経に接触する対象の〈像〉ではなく、そこに確認しうるのは「創造主による相互的な法則<sup>38</sup>」として確立さ

れた対応関係のみである。そしてハラーは571節において「身体と魂がどのようにして結合しているかについて自らの無知を告白し、神によってあらかじめ定められた既知の法則を超えて先へ進もうとせず、経験によって支持されることのない推測を<sup>39</sup>発明したり提出したりすることのない人々」の「謙虚さ」を評価するのである。創造主によってあらかじめ定められた法則という論点は、物質における形成力という概念に関しても重要な位置を占める。ここでわれわれは生物の発生をめぐる議論へと移行することとなる。

生物発生論におけるいわゆる前成説・後成説に関して、ハラーは理論的転向を2度演じている。<sup>40</sup> プールハーフェの前成説から出発しながら、トレンブレーによるヒドラの再生実験を通じて、物質の形態形成力に基づいた後成説がやがて実験と観察によって実証されるであろうとひとたびは確信したハラーは、ビュフオンのドイツ語訳『博物誌』第2巻の序文(1752)において後成説批判に転じている。解剖によって開示される個体の多様性(「一つの身体の個々の部分、無数の血管・神経・繊維・骨格などを一つの永遠の設計図に基づいて組み上げるすべを心得ているような賢明な力を、わたしは全自然のどこにも見出すことができない」<sup>41</sup>)は、後成説が要求するようないわば完全にプログラム化された力(「ビュフォン氏は、求め、選択し、一つの目的を持ち、あらゆる盲目的結合の法則に反して、常に誤りなく同じ目を出すような力を必要とする」<sup>42</sup>)の存在を否定するからである。力に内在するプログラムを否定する一方で、ハラーはいわば力を制御するプログラムの存在を認める。序文の後半部において、自己組織化する物質というビュフォン(およびニードム)の思想がキリスト教の信仰から離反するものではないかと恐れる必要はないという論を展開するにあたり、二つの論拠があげられる。第一は、神の存在を我々が確信するのは、動物の生殖の仕方や成長によってではなく、構造(Bau)と目的(Absicht)の調和のうちに見出される造物主の知恵ある手の痕跡によってであるということ。そして第二に、物質の形成力を制御する基本図式<sup>43</sup>の存在である(「物質が何かを形成する力を持っているのであれば、それは盲目的な仕方においてではない。それらの力は永遠の拘束のうちにあり、それが常に完全に形成するものは、機械的に同一のもの

(das mechanisch Gleiche)ではなく、ある侵害不可能な基本図式のうちにあらかじめ指定された、〈似たもの (etwas ähnliches)〉である。それは、ある種の多様性を許容するが、盲目的に作用する物質の強制は排除する<sup>44</sup>)。宗教的問題と直結させることなく、あくまで経験的領域においてこの問題を追及していこう、そうすれば、「経験が我々を真実へと導き、真実は我々を神へと導いていくであろう<sup>45</sup>」と序文は結ばれる。

発生の問題に比すると、死はハラーの生理学においてあつけないほどの簡潔さで論じられる。『初歩』では、最終章「栄養摂取、成長、生および死」の最後の3節、原著で1ページ足らずのうちに、随意筋・不随意筋・そして心筋の活力が次第に喪失していく老衰死について、「心臓の全刺激感応性の消失」という死の定義、そして分解について論じられたのち、この最初の生理学教科書は次のように閉じられる：「魂は神が定めたもうたところへ旅立つ。死によって魂が破壊されることはない。病によって身体の力を失いながらも、とても穏やかで生き生きとし、喜びに満ちた魂を所持しているのがはっきり見て取れるという結核患者によく見られる事例からそれは明らかである<sup>46</sup>」。すでにその10年前、彼は「悪の起源について」(1734)の中で死について同じような見解を提示していた：「[天使たちの]はるか下方で、この死すべき種族 [=人間] は/天上と無の二重の市民権を持つ。/類なく確固とした素材から神はこの種族を選び出した、/なかば永遠、なかば分解の定めへと。/二重の意味を帯びた、天使と動物の中間物、/それは自らの死を生き延びる。それは死に、そして決して死ぬことはない」(II.V.103-108, S.177, [S.62f.])。

時と領域の隔たりを超えて認められるこの同一性は、ハラーにおける死の捉え方の一貫性を明示しているように見える。しかしこの一貫性は確固たる、安定したものだったのか、それを確かめるには、あらためて彼の詩へ向かわねばならない。

## 3.

1736年、最初の妻マリアンネの死という形で、死という主題は彼の人生に決定的に介入し、それはいくつかの詩に結実する。1736年11月と表題に成立年を付された「愛するマリア<sup>47</sup>ーネの死に際しての哀悼詩」*Trauer-Ode, beim Absterben seiner geliebten Mariane*（以下「哀悼詩」）第3節において、この主題に関して従来の詩とは別種の作品を書くという宣言がなされている。

知性（Witz）が生み出す語り（Rede）や、詩人の歎き（Dichter-Klagen）をやってみせるのではない。／ただ、溜息をつくだけだ、心が苦しみを言い表せないときに。／そう、わが魂を描き出すのだ、／愛と哀しみに惑い、／悲しみの心像（Trauer-Bildern）にひととき苦しみを忘れ、／わが魂が苦悩の迷宮を彷徨うさまを！」（V.17-24, S.222, [S.81f.]）

「知性が生み出す語り」が哲学的教示詩を、「詩人の歎き」がある種定型化した哀悼の表現を意味しているとすれば、ここで表現されるべきは、言語として分節化される以前の「溜息」であり——第4行には「溜息が言葉と争い」とある——こうした表現は、ハラーによれば「悲しみの心像」を媒介として可能となる。つづく第4節では臨終の場面が（「まだ見える、蒼ざめたおまえ、／絶望しながらおまえのもとへ歩み寄るわたし／（……）」（V.25-26, S.222, [S.82]））、第5節では喪失の空間としての「家」と「教会堂」が描き出される。そして面影の類似が不在の意識をさらに掻き立てる「子供たち」に「わたし」は脅かされる。節の最後に「どこへ逃げていこう、ああ、できるなら、おまえのもとへ！」（V.40, S.223, [S.82]）と哀悼詩の一つの定型である〈別離・喪失から再会へ〉というパターンを踏襲するかと思わせながら、ここで詩は大きく転回する。つづく第6節から第9節までに描かれるのは、「わたし」のもとへ嫁いだマリアンネにおける故郷喪失と、二人のいっそう強い結びつきなのである。姉妹との別れの情景、船出する二人の前から、故郷の土地と共に彼女たちの姿が消えていくさま、そして「心静か

にわたしは行きます。/足りないものがあって? ハラーも一緒なのに!」(V.55-56, S.224, [S.83])という彼女の言葉——〈喪失から、より親密な空間の開示へ〉という運動イメージがここには定着されている。第10節ではマリアンネの徳が列挙され、11節では「わたし」がいかに彼女を愛していたかが回顧される。12節で、喪失の哀しみが長く続くことが確言され、13節では「わたし」の孤立と希求が再び空間的イメージを通して表現される(「限りなく深い森、暗い藪の中、/誰もわたしの歎きを耳にしないところ、/そこにわたしはおまえの愛おいしい肖像を探そう。/誰もわたしの記憶の邪魔をしないところで。/(……)」(V.97-100, S.226, [S.84]))「暗さ」を媒介として、14節では夜空のイメージが導入され、最後の第16節までこの詩のクライマックスを形作ることとなる。「また天の奥深く、/暗き中で、わたしはお前を乞い求めよう」(V.105-106, S.227, [S.84])と希求のモチーフを反復した直後に、「そして探求しよう、お前の足元で回転している/星々よりもいつそう遠くまで」(V.107-108, S.227, [S.84])という詩句が新たな空間を開示する。それは「探求」(forschen)の空間であり、「家」や「教会堂」といった喪失の空間や、「深い森」「藪の中」といった彷徨と希求の空間とは性質を異にしている。「聖化された学問の光によって/おまえから無垢が輝きだし、/束縛から解き放たれた、魂の新たな力が/かつての限界から飛び出す」(V.109-112, S.227, [S.84])この空間には、「神の光」「天使の響き」「おまえの歌と祈り」が共存しており、そこでは弁神論的真理が開示される(「神はおまえのために運命の書を開いてくれる。/そこには書かれているのだ、わたしたちの別離の目的と/わたしの定められた人生行路が」(V.118-120, S.227, [S.84])).「おお、わが望みに否と言わないでくれ! /おお、その腕をひろげておいてくれ! /わたしは急ぐ、永遠におまえのものとなるために!」(V.126-128, S.228, [S.85])という再会への希望で詩は閉じられる。

「深い森」「藪」といったイメージや弁神論的解決への試み、喪失の歎きから再会の希望へという詩想の運動だけを見ると、この詩はやはり「知性が生み出す語りや、/詩人の歎き」に分類されるものであるように思われる。<sup>50</sup>それに対し、この詩を独自のものたらしめているのは、なによりも〈喪失から、



より親密な空間の開示へ」という運動が二重化されている点だろう。〈地上／天空〉という詩全体を規定する空間的枠組み——これは「わたし」のパースペクティブによる——に対して、詩の中央に据えられた、仮想的にマリアンネのパースペクティブから描き出される〈喪失する故郷／二人だけの親密な空間〉が入れ子となって、地上における喪失感をいっそう強調すると同時に、結末における希望——これもあくまで、「ひととき苦しみを忘れさせる」「悲しみの心像」でしかないのだが——に類型的枠組みからは生じえないような切迫感を与えている。

翌37年成立と表記された詩「同じく彼女について」*Über eben Dieselben*には、このようなダイナミズムは見出せない。そこでは、現在における喪失と、この喪失の空間——それは墓所に集約される——のみを自らの居所としようという決意、そして弁神論的正当化の試みが反復され、異なっているのは、再会と「わたし」の死との結びつきが具体的に述べられている点のみである（「おお、わが身体が分解してしまえばいいのに、／わたしを彼女と隔てずにおかないこの身体が！」（V.79-80, S.230））。翌38年、故郷スイスの批評家ボードマーに宛てた詩篇——ここでも新たな詩想の展開は見出されない——を経て、生と死をめぐるハラーの詩的思考は「永遠についての未完のオード」*Unvollkommene Ode über die Ewigkeit*——48年の第4版以後は「永遠についての未完の詩篇」*Unvollkommenes Gedicht über die Ewigkeit*と改題される、以下「永遠について」と略記する——においてある転回を迎える。

『スイス詩の試み』第3版（1743）にはじめて収録されたこの作品には、1751年の第6版以降1736年という成立年が付記されている。しかしグートウケの研究により、現在ではその主要部分は1737年から42年のうちに成立したであろうと推定されている<sup>51</sup>。第3版の序文では、この詩に言及して次のように記されている：「近年の作品のうち、最後のもの〔この詩を指す〕は断片である。現在の生活の在り方において、いつかそれを完成するという希望を抱くことはできない。いつの日か、それにふさわしいだけの力を心に感じることができたなら、分離された魂がもつ諸力の発展について思索を展開してみたいものである」<sup>52</sup>。「分離された」とは「身体から分離された」を意

味している。死後も魂は力を持ち、それはさらに発展すると考えられているわけだが、これは身体を魂にとっての枷とする「同じく彼女について」の詩想と照応する。しかしこの思索を展開するだけの気力が今はないという確認ないしは断念のほうに序文の力点は置かれている。マリアンネ哀悼詩群の結末部における、トポスとしての類型性を持ちつつも高揚した調子は、ここには全く見出せない。さらにこの詩に付された序言にはこうある：「生物の、あるいは希望の終極としての死について語る際わたしがもちいる表現に怒りを覚える人がいないように、あらかじめ述べておきたいが、こうした語り (Rede) はすべて非難であるべきものだった。このオードを最後まで書ききることができたなら、わたしは自らこの非難に応答したはずである」。<sup>53</sup> ハー生前最後の第 11 版 (1777) においては、さらに次の文が付加されている：「しかし、第二の生は断固として受け入れられている」(S.209)。くどいほどまでに繰り返されることで、この「第二の生」が、そして「分離された魂がもつ諸力の発展」が詩として描き出されることがなかったという事実にわれわれの関心は向かわざるを得ない。この詩の中に、彼に最後まで書くことを許さないような何かが書き込まれてしまっているのだろうか。<sup>54</sup>

まず、全編の翻訳を挙げる。叙述の便宜上、詩節ごとにローマ数字を付す。

\* \* \*

### 「永遠についての未完の詩篇」

[ I ] (V.1-10, S.208f., [S.75])

森よ！ 暗いもみの木を貫く光もなく、／藪には墓所の夜が塗り込められる。  
 ／空ろな岩場よ！ 灌木のなかをさまよう、／寂しげな鳥たちの悲しげな一  
 群が羽音を立てる。／小川よ！ 枯れた草地を生気なく流れ、／見捨てられ  
 た水流を荒涼たる沼へ注ぎこませる。／死に絶えた広野と身の毛もよだつ土  
 地よ！／ああ、おまえたちのもとに死の色が見出せたなら！／ああ、冷たき  
 戦慄と黒き悲嘆でわが苦しみを培うがいい！／わがため、〈永遠〉の心象で  
 あれ！

## [II] (V.11-16, S.209, [S.75])

わが友は去った。／この乱れる心の前に、その影はいまも漂っている。／その姿が見えるようだ、その言葉が聞こえるようだ。／だが、何一つ戻ることを許さない／あの厳しい場所に、／永遠が、その強固な腕で彼を押し止めている。

## [III] (V.17-24, S.210, [S.75f.])

来るべきものは、その光で彼の安らぎを妨げはしなかった。／今日も、この世という芝居を熱心に見物していた。／鐘が鳴る、幕が落ちる、／すると、あれほどにも現実と<sup>55</sup>思っていたものすべては無となる。／荒涼たる霊界の分厚き夜が／その戦慄に満ちた影でいまや彼を包んでいる。／意識に備わっていたもののうち、残されたのは、／ただ欲望だけだ。

## [IV] (V.26-30, S.210, [S.76])

そういうわたしは？ より高き位階にあるか？／いや、いまのわたしは、かつての彼だ。／わたしも同じようになる。／わが朝は過ぎた。いやおうなく真昼は動いていく。／夕べが訪れる前に、思いがけず早い夜が、／朝への希望によってその苦みを和らげられることもない夜が、／永遠にこの目を閉ざしてしまうかもしれない。

## [V] (V.31-36, S.210, [S.76])

厳しき永遠の恐るべき海！／いくつもの世界と時代の太古の源泉！／いくつもの世界と時の果てしなき墓所。／現在性の確固たる領界！／過去という灰は、／あなたにとって、未来なるものの萌芽だ。

## [VI] (V.37-44, S.211, [S.76])

無限よ！ 誰があなたを測る？／あなたのもとでは、諸世界はそれぞれ一日であり、人間の生は一瞬だ。／幾千もの太陽が、いま回転している、／そしてなお幾千もが後からやってくる。／時計が重りによって魂を吹き込まれる

ように、/一つの太陽が、神の力に動かされ歩みを急ぐ。/その動力が尽きる、と、別の太陽が時を打つ。/しかしあなたは留まり、時を数えることもない。

[VII] (V.45-50, S.211, [S.76f.] )

星々の静かな威厳、/指標として、我々にしかと定められてあるもの、/それはあなたの前を素早く過ぎ去る、暑い夏の日の草のように。/正午には若々しく、黄昏前には萎れてしまうバラのようだ、/あなたに比べれば、北極星と大熊座は。

[VIII] (V.51-62, S.211f., [S.77] )

新たな存在がカオスと戦っていたとき、/重さをもつものが落下という道筋を学ぶより早く、/世界がほとんど月も満ちぬまま深淵より飛び出したとき、/ <sup>いにしえ</sup>古の無の夜に最初の光条が差したとき、/あなたはいとと同じく自らの源泉から遠くあった。/そして、第二の無がこの世界を葬り、/万有のうちで場所だけが残る、/いくつもの天空が、それぞれ別の星々によって明るく輝き、/その運行を終えてしまったときでも、/あなたはいとと同じく若々しいまま、自らの死から遠く、/今日と同じく永遠に未来のものであるだろう。

[IX] (V.63-75, S.212, [S.77] )

思考の素早い動き、/時も、響きも、風も、/光の翼すら、それに比すれば緩慢であるもの、/それはあなたに取り組み、疲れ果て、だがけっして制限されようとはしない。/わたしは途方もない数を、〈数百万〉という山塊を <sup>57</sup>積み上げる。/時に時を、世界に世界を積み重ね、/有限なるものの領域の/戦慄すべき高みから、/眩暈とともに、再びあなたを眺める。/そのとき、数のあらゆる力が何千倍になっても、/それはいまだあなたの一部ではない。/その数を消去する、するとあなたは全きまま、わが眼前にある。

[X] (V.76-85, S.213, [S.77f.] )

神よ、あなただけがすべての根拠。/あなたは太陽だ。尺度を受け付けない、

時の尺度だ。／あなたは同じ力を保ち続け、つねに南中している。／昇ることもなければ、沈むこともない。／あなたのうちなる唯一の今は永遠だ。／そう、あなたのうちなる確固たる諸力が消失しようものなら、／すぐに、大きく口を開き／総体としての無が、存在の全領界を、／時も永遠もともに／呑み込んでしまうだろう。大海が一滴の水を呑み込んでしまうように。

[XI] (V.86-93, S.213, [S.78])

偉大さの極致よ！／あなたに<sup>あい</sup>相対しながら自らを保とうとする、この人間とはなにか！／それは一匹の虫けら、世界のうちなる一粒の砂。／世界すら一つの点だ、それをあなたで測るとすれば。／昨日から、わたしはせいぜい半ば熟した無であるにすぎず、／そして明日には、わが半存在は無へ戻っていく。／わが生涯の歩みは白日夢のよう、／ならばいかにして望みえようか、あなたの歩みに最後まで付きしたがおうなどと。

[XII] (V.94-103, S.214, [S.78])

わたしは、わたしから生まれたのではない。望んだ故に生まれたのではない。／異質な何か、わたしではなかった何かが、／あなたの言葉を受け、わが自我となった。はじめ、わたしは植物だった。／おのれを意識することなく、欲望を抱くほど成熟することもなく。／そして、ながらく動物だった、／すでに人間という名で呼ばれていても。／美しい世界はわたしのために造られてはいなかった。／耳は膜に塞がれ、眼は白濁して<sup>58</sup>いた。／思考は感覚にとどまり、／知っていたのは、苦痛・空腹・そして紐帯のみ。

[XIII] (V.104-117, S.214f., [S.78f.])

この虫けらに、わずかな土くれと／白い液汁が加わった。／うちなる衝動が、柔弱な腱を／伸ばし、わがために役立て始めた。／転ぶことで、足は歩みを学び、／育った舌は、呂律まわらぬながら喋り始め、／身体とともに精神も成長した。／いまやこの虫けらは、習熟せざる自らの力を試し始めた。／あたかも、暑さのせいで急に蚊となったボウフラが、／いまだ半ばボウフラの

まま、飛ぼうとするかのごとく。／わたしは、あらゆる事物を見知らぬ奇跡のように見つめた。／日ごと豊かになり、昨日と明日を理解し／測り、計算し、比較し、選択し、愛し、怖れ、／誤り、失敗し、眠り、そしてわたしは人となった！

[XIV] (V.118-125, S.215, [S.79])

すでにこの身体は感じている、無が近づきつつあるのを。／生の長い重圧が、疲れた四肢を押しつぶす。／喜びは去っていく、翼はためかせ、／憂いなき若さのもとへ。／吐き気は、日増しに増し、光の魅力を歪め、／世界へ、希望なき影を撒き散らす。／行を連ねるたび、わたしは感じる、精神の疲弊を。／もういかなる衝動も感じない、安息をもとめる衝動のほかは。

\*\*\*

全体を、[I]（「わたし」による語りの場の開示）、[II]－[IV]（友の死という出来事と、「わたし」の反問）、[V]－[IX]（天文学と数学の導入による永遠と無限の諸相の言語化の試み）、[X]－[XI]（神の導入、総体としての無、無としての人間）、[XII]－[XIII]（人間の生成史）、[XIV]（書いている現在への「わたし」の回帰）と分節化することができるだろう。これまでのさまざまな解釈も、こうした分節化——それぞれのブロックの特性規定に関しては相違がみられるが——においては共通しているといつてよい。しかし、ブロック相互の関連や全体の読みに関しては対照的といつてもよい解釈が提出されている。

ヘルブリンクは、詩全体の運動を、「闘争的な語りかけ」から「万有と人間に対する純粹で称讃的な描写」を経由し「あるがままの世界に対する詩人の承認の表現」に至るものと特徴づける。中間部において、「彼岸としての永遠は万有のうちに吸収され」<sup>59</sup>、万有そのものが神的・永遠的なものと化し、それを前にした詩人は、詩の出発点にあった「死の不安を忘れ、正統派キリスト教的な現存在の感覚を忘れる」<sup>61</sup>。しかし、あらためて空間を超越した神

が呼び出され、これまで謳われてきた「宇宙的な無限性」<sup>62</sup>が残した印象と、「再び〔語り手の〕脳裏に蘇ったバロック的・正統派キリスト教的世界観」<sup>63</sup>が、自らの卑小さを強調する「謙譲」<sup>64</sup>へと語り手の態度を変化させる。つづいて人間の卑小さを自然科学的に裏付けることが試みられるが、胚から胎児、そして幼児へと成長していく描写において、発達における「驚嘆すべき目的追求性と合目的性」<sup>65</sup>が強調されることによって、逆に「人間は、神に完全に依存した被造物ではもはやなく、自律的な存在としての自己を明らかにする。(……) こうして死への不安は不要となり、万有と人間の内在的な合目的性と完全性に基礎づけられた現世的な信頼がそれにとって代わる」<sup>66</sup>。最終詩節は、「非闘争的・諦念的」で「おどろくほど直接的な自己表白」<sup>67</sup>であり、老い・万有の持続・人間の驚嘆すべき成長の3つの事実が、「実存の説明しえない謎めいた現象として併存されたまま」この詩は終えられるとする。この詩が中絶したという事実について、ヘルブリンクは、本来問われるべきであった問い——それは死への不安と切り離せない——は、詩の進行の中で「もはや必要ないものとなっている」<sup>69</sup>と述べるにとどまっている。

グートウケの解釈は、これに対し、この詩における未解決性と、伝統的なキリスト教的世界観に対してここで展開された詩想がもっていた危険性、そして詩想の進行における無媒介的な転換に注目する。詩の中間部において、神学的・バロック的概念としての永遠（時間の中に常に現前する〈全く別のもの〉として信仰の対象となるキリスト教的超越）が、近代的で数学的・自然科学的な永遠概念（時空の無限の広がり）にとって代わられるという確認<sup>70</sup>において両者は共通するが、ここでは「自然科学者の語りにおける冷静さ」<sup>71</sup>と、その背後にある「宇宙論的な戦慄と熱狂のまじりあった〈崇高〉の感情」<sup>72</sup>が強調される。確かにハラーは創造における神の力を強調し、「創造されざる自然の神化を企てることもない。しかし彼は経験的・物理的世界の無限性としての永遠を絶対化するという危険を冒している」<sup>73</sup>。つづく神への呼びかけによってそうした絶対化は「撤回」<sup>74</sup>され、永遠はその神学的意味を取り戻す。しかしこの節の最後、〈神の確たる力が消失してしまったら〉という仮定が導く帰結を述べるさいに、再び〈あらゆる創造を超えて存立し続



ける無》が前面に押し出される。ハラーはここで「神学的な危険地帯」<sup>75</sup>から身を転じ、神の熱狂的な称揚へ移行する。つづく人間の卑小さの強調から成長の一貫性に対する驚嘆への転換に関しては、現世的存在である人間の絶対化ではなく、あくまでキリスト教的な創造への信仰（神の言葉による誕生）が堅持されている点に注意が向けられる。しかし、「魂が自らの本来的な偉大さへと飛躍するという観点がこの詩には欠けている。（……）同様に、魂が、神ないしはキリスト教的な救済者のもとへ帰郷するというモデルに立ち返ることもない」<sup>76</sup> まま作品は中断される。その中断のうちに、グートウケはハラーの「精神史上の位置がもつ緊張」<sup>77</sup>を読もうとする。すなわち、「パロックの神学的伝統と、神による支配からの解放という近代の冒険のはざま」<sup>78</sup>にあって、〈永遠〉がもつ「不死性、非－有限性という神学的な意味内容と、（前カント的な意味における）時間と空間の限界なき広がりという自然科学的な意味内容を（……）感情的かつ知的な労苦に満ちた解明の試みの中で（……）一致させようとしたが失敗に終わった」<sup>79</sup>この詩篇の分裂と解答のなさのうちに、そうした緊張が反映されているというのが彼の解釈の結論である。

本来あるべきであったさらなる展開に対するハラーのこだわりを考慮するとき、作品の未完性を強調するグートウケの解釈が説得力を増すことになるだろう。また、ハラーを精神史上の一つの境界的存在とする位置づけは、ハラーにおける境界／限界の諸相を問題とする本論考に大きな示唆を与えてくれる。ただ、「悪の起源について」「哀悼詩」などと対比させることによって、少し違った角度からこの詩の独自性へと接近することも可能ではないか。上記の解釈では、二つの異なった〈永遠〉把握が問題となっていたが、それが詩によって作り出される想像力的な時間・空間イメージにおいて、特に発話者である「わたし」との関係においてどのように造形されているかという点は、さらに検討に値すると思われる。

「悪の起源について」と同様、この詩は外的な自然の描出から出発するが、ここでは「森」「藪」「岩場」といった伝統的イメージを列挙する頓呼法が用いられている。自然への呼びかけというトposによって、いわば舞台が設定

されたのち、主語としての「わたし」が導入され、最後の命令法によってこれらの伝統的イメージが「わたし」に統合される。「悪の起源について」では、外的な風景描写に続いて「内なる想念」へと視点が転じられ、〈外部／内部〉という空間モデルが二つの異なった世界観と結びつくことで思索を展開する詩的探求の空間が開かれた（本論第1章参照）。それに対し、ここでは描き出される自然のイメージがそのまま〈永遠〉のイメージ－比喩（Bild）であることが要求される。空間の二重化はここにはなく、イメージと「わたし」は、いわば直接向き合っている。

〔Ⅱ〕の冒頭、「わが友は去った」という詩句は、現世／来世の二世界論的空間構造の導入を予想させるが、ここでは「哀悼詩」のように〈来世〉——この詩の序言の言葉を用いれば「第二の生」——が空間的イメージとして展開されることはない。嘆く「わたし」にまなざしを注ぎながら、やがて「わたし」を迎え入れてくれるであろう新たな親密性の空間は、この詩では「何一つ戻すことをゆるさない／あの厳しい場所」と化している。バロック的な世界劇場のモチーフ（「この世という芝居」）が導入されはするものの、この芝居を見物しながらそのすべてを差配している超越的人格神のモチーフが消えていることも、新たな親密性の空間の消失と関連しているだろう。「わたし」と死者との関係の表現においても、「哀悼詩」との際立った対比が確認される。「哀悼詩」における「再会」が人格的同一性の存続（と純化）を前提としているのに比して、この詩における「荒涼たる霊界の分厚き夜」は、そうした人格的同一性さえ解消させてしまう。「わたしも同じようになる」としても、それは再会ではなく、「欲望」へと還元されたもの同士の出会いならざる出会いでしかない。こうした親密ならざる「厳しい場所」を支配し、二世界論的な人格的コミュニケーションを断ち切るものが「永遠」である。以下、〈わが友〉はこの詩からも〈去り〉、直接〈永遠〉に呼びかけながら、その言語化が執拗に試みられていく。

マリアンネへの呼びかけは、「わたし」とマリアンネがともにいる空間の想像的定立へと導き、死のイメージへの呼びかけは、語りにより広がる空間を「わたし」に統合する機能を帯びていた。永遠への呼びかけを核として展

開される宇宙論的ヴィジョンに特徴的なのは、それを見ている「わたし」の存在がいわば前景から退くことである。[V] から [Ⅷ] まで、見ている主体としての「わたし」は消えたままイメージが展開されるが、あたかもこうした語り・イメージの展開の土台としての人間の思考と無限の関係そのものを描き出そうとするかのように、[IX] では突然話題が人間の思考力へと転換される。人間の思考力が顕揚されたのち、永遠－無限を「眺める」わたし<sup>わたし</sup>がテキストに登場する。思考の活動は「わたし」の肉体的活動へと比喩的に転化されるが、その帰結は、いっさい変化することなく「わたし」の「眼前にある」無限という、もはや視覚的イメージでは捉えられないものである。むしろ、想像力的空間において視覚的イメージが成立するためのパースペクティブが成立せず、それ以上のイメージの展開が不可能になるという事態の露呈といったほうがいいかもしれない。イメージの展開が不可能になるということは、教示詩における〈探求の空間〉の展開が不可能になるということである。ここにおいて、いわば教示詩は自らの限界につきあたったといえるのではないか。

つづく神への呼びかけによって、想像力を発動させ作品のさらなる展開を可能にするために神と「わたし」という二極構造が導入され、語りの対象は自己へと転じられる。作品は「行を連ねている」現在における「精神の疲弊」で途絶するが、この疲弊はある限界の意識と切り離せないものとしてここに定着されているように思われる。詩において人間の限界は、主題として書き込まれ<sup>書き込まれ</sup>もするし、それ以上詩的想像力を展開することの不可能性として露呈することもある。この詩篇では、〈永遠〉との関わりにおける想像力の限界の露呈が、神との関わりにおける主題としての有限性へと置き換えられながら、しかしそれに解消されることなく自らの無力の記憶を詩的主体に刻み込んでいる。そこには『判断力批判』で分析される崇高におけるような、否定から肯定への転換、超感性的使命への思考という契機は欠落している。

そもそも死へと定められた身体と不死の魂が厳格な境界線で分割されることで、有限な存在である人間にそれぞれ大きな活動領域が開示されたのだった。身体はあくまで経験的な知的探求の領域として、それ自身限定された人

間の認識能力に対して汲み尽くされることなく対象を与え、不死の魂という観念は「哀悼詩」に描き出されたような想像力による親密性の空間に希望を託すことを可能にする。もちろんこうした可能性と希望は、不可能性と恐れに容易に反転しうる。「人間の美德の過ち」における知的探求のドラマ、そして「悪の起源について」におけるペシミズムとオプティミズムの対立の基盤にあったのも、そうした絶えざる反転可能性に他ならない。この詩において「疲弊」と結びついている限界の意識は、しかしそのような反転のプロセスに回収されることなく、むしろ反転を繰り返しながら続けられていく精神の営みを侵食するものとしてハラーの中に残り続けたのではないか。もちろんこの詩の〔IX〕がそうした意識を生み出したというのは短絡にすぎる。しかし少なくとも、これまで反転の契機をなしていた限界の意識とは別種の限界の意識の表現をここに読み取ることは許されるだろう。超人的ともいえる活動のなかで彼を侵食していった抑鬱状態についてこうした観点から考察すること、そしてさらに大きく「啓蒙とメランコリー」<sup>80</sup>という主題へと展開することもできるかもしれない。

死の年にあつて詩集の序文に〈永遠〉と書き記すとき、30年以上前に書いたこの詩が、その未完性ととともに念頭に置かれていたことは疑いえない。最晩年、死に直面しているハラーを待ち受けていたのは、死者が待つ親密性の空間ではなく、人間の思考力と想像力を脅かすものとしての〈永遠〉だったのである。

#### 4.

カント（1724-1804）の『天界の一般自然史と理論』*Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels*（1755）の第2部第7章「空間および時間において無限な範囲にわたる創造について」では、「永遠について」が二回引用される。「新しい宇宙がたえまなく形成されることによって、無限の時間と空間において創造は続行している」<sup>81</sup>（「本書全体の要旨」より）と論じるにあたり、「ドイツにおけるもっとも崇高な詩人が永遠性をつぎのようにえがいている

が、われわれもこれと同じことを創造について語ることができるだろう<sup>82</sup>と述べられた後で、「永遠について」第6節（「無限よ！ 誰があなたを測る？ / (……)」）が引用され、「要するに自然は、神によって啓示された計画を拡大すべく前進し、永遠の時間とあらゆる空間を啓示の奇跡によって満たそうとする。(……) 精神は、自分がこれらの変化のすべてを生き延びるはずだと気づいたとき、自分自身の本質に畏敬の念を覚えざるをえないだろうし、あの哲学的詩人が永遠について語ったのと同じことを、自分自身にむかっても言えることだろう<sup>83</sup>」という叙述に続くのが、第8節の後半部（「そして、第二の無がこの世界を葬り、/ (……)」）の引用である。そして、最終部である第3部「付論 異星の住人について」の最後に、ポープの『人間論』（ブロッケスによる独訳）から自然における無限の連鎖に驚嘆する詩句をひき、つづいて「罪が宇宙の他の球でも支配しているのか、それともそこでは美德だけが支配しているのか——あえてこれに答えるほど大胆な者などいない。しかしながら」と述べたあとで、いわば「空想の草原」における大胆な答えとして、「悪の起源について」第3部から、「星はおそらく神々しい精神の座である。/ ここで悪徳がはびこっているように、あそこでは美德が主人である」が挙げられるのである。<sup>84</sup>創造の永遠性、精神の永遠性、無謬の天界——ハラーは、完全にオプティミズムと弁神論の体現者として登場させられている。『フンク君の早世を悼んで』（1760）において、「永遠について」第2節より「だが、何一つ戻ることを許さない/あの厳しい場所に、/永遠が、その強固な腕で彼を押し止めている」が引用されるときも、それは「「早世」という悲惨な出来事を「自己自身の置かれた観点からできる限り遠くで」再解釈しようとする「オプティミズム」の「非人間中心主義的」観点<sup>86</sup>」からであり、原詩において「わたし」の問いを発動させる不安と衝迫力をそこから感じ取ることはできない。『美と崇高の感情にかんする観察』*Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen*（1764）では、すこし事情が変わってくる。第1章「美と崇高の相異なる諸対象について」の結語として「ハラーの未来の永遠についての叙述は穏やかな恐れを、過去の永遠についての叙述はこわばった驚異を注ぎ込む<sup>87</sup>」と述べられるとき、ここにオプティミズムを見

出すことはもはや困難だろう。『純粹理性批判』*Kritik der reinen Vernunft* (1781)においてこの転回は完了している。第2部「超越論的弁証論」第3章「純粹理性の理想」の第5節「神の現存在の宇宙論的証明の不可能性について」に、次のような決定的言及がある：「すべての物の最終の担い手として私たちがかくも不可欠的に必要とする無条件的必然性は、人間的理性にとつての真の深淵である。永遠性ですら、たとえそれをハラーのごとき人が戦慄するほど崇高に描こうとも、とうていめまいがするほどの印象を心に対して与えることはない。なぜなら、永遠性は諸物の存続を測るだけで、諸物の存続を担うものではないからである。」<sup>88</sup>「測る」という表現が、カント自らがかつて引用していた「無限よ！ 誰があなたを測る？」以下の詩句を踏まえ、それを逆転させたものであることは明らかだろう。永遠からは、カントの考える崇高性も剥奪されるのである。この詩では想像力の無力の意識が、否定から肯定への転換と超感性的使命への思考という契機を伴っていないと前章で述べたが、カントのこの評価はそれと符合するものだろう。

ヘルダー (1744-1803) が対話編『神』*Gott* (1787) において、神の現存在 (Dasein) をめぐる議論のなかで『純粹理性批判』の上記の箇所をほとんどそのまま引用しているのは興味深い事実である。その直前の箇所で「自然には無は存在しない」<sup>89</sup>と論じる際に、「永遠について」第7節から無をめぐる詩行を引用しながら、それは概念把握しがたい事態であつて、そこには「詩としての意味」<sup>90</sup>しかないと断定される。この評価は、〈概念/詩的イメージ〉という18世紀美学において根本的な区別に基づいているのだが、注目すべきことに、ヘルダーはハラーにおいて〈詩的イメージの自己否定〉が生じているとみなす。第4対話で、カントが『天界の一般自然史と理論』で引用した「無限よ！ 誰があなたを測る？」以下の詩句が同様に引用されるのだが、それは「われらのハラーが、無限なものを描写するために空想のあらゆる力を奮っているのがわかるだろう。しかし彼は描写することができないのだ」<sup>91</sup>という言葉と共になのである。「しかしあなたは留まり、時を数えることもない」という詩句に関しては「最後の一行で詩人はみずから描き出したものの全体を自分で根絶している」<sup>92</sup>と断定される。「もっと美しい永遠

のイメージ」としてヘルダーが挙げる「永遠について」第9節においても、最後の「それはいまだあなたの一部ではない。/その数を消去する、するとあなたは全きまま、わが眼前にある」という詩句において同様の事態が生じているとして、「無限の空間、無限の時間についての形而上学的な空想や空虚な直観を、いわんや分割不可能な永遠の現存在のイメージ化を断念すること」<sup>93</sup>が、この「哲学的な詩人」から学ばねばならないとされるのである。ヘルダーが「自ら根絶する」というときの「自ら」という表現が意味しているのが「自覚的に」なのか「知らないうちに」なのかは確言できない。それ以上想像力を展開することの不可能性の意識から、つづく節における「神よ!」という伝統的な呼びかけ形式への転回が生じていると前章で論じたが、ヘルダーがハラーにおける限界の意識化を「永遠について」のうちに読み取っていたかどうかは不明である。しかし、「人間の美德の過ち」における、自然の内奥に踏み込むことができないという限界の意識——これについては第1章で論じた——についてこの対話編で言及されていることは確認できる。第5対話において、「事物の内的本性を見通すための感覚を我々は持っていない」<sup>94</sup>というハラーの詩句を想起させる発言に続いて、外部にとどまり観察する人間には、しかし「自然の生きた調和」<sup>95</sup>が開示され、「近年の注意深い自然学」は対象の一つ一つに「自ら存立した調和と善と知恵からなる世界」<sup>96</sup>を示すと述べられるのである。ただしこの発言は、生きた内的諸力の現れとしての有機構成を、その美しい外的形態のうちに見出そうとする女性の言葉を受けたものであり、議論はただちに生きた諸力の有機構成そのものの原理へと向かう。自然科学者ハラーと詩人ハラーの関係をヘルダーがどのようにとらえていたか、それがあらためて問われねばならない。

『近現代ドイツ文学について』*Über die neuere deutsche Literatur* (1767)において、教示詩を論じるさいハラーを「ドイツにおけるルクレティウス」<sup>97</sup>と呼ぶヘルダーは、「永遠について」「悪の起源について」の名を挙げながら、ハラーを実際にはルクレティウス以上に評価している。20年後の『神』における、そうした無条件の賞賛からの変化に、『純粹理性批判』の刊行がかかわっていることは間違いないと思われる。しかし同書の刊行以後も、自然科学者ハ



ラーに対するヘルダーの賞賛はまったく変わることがなかった。この賞賛が「魂」という問題と結びついているのは興味深い。『人間の魂における認識と感受について』*Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele* (1774年第1稿、1775年第2稿、1777-78年第3稿)では、感受の生成をたどっていくと、最も原初的な現象としてハラーが「刺激」と名付けたものに突き当たると論じられる。第2章でみたように、ハラー自身は魂と身体を明確に分離したうえで刺激感性性を探求したのだが、ヘルダーはむしろ、ここに魂と身体の結びつく場、ないしは共通の根を見る。そこで要請されるのは、心理学と生理学の共働である。「卑見であるが、その歩みの一步一步において、ある特定の生理学でないような心理学は存在しえない。ハラーの生理学的著作が心理学にまで高められたとき、そしてちょうどピグマリオン<sup>98</sup>の像のように精神によつて生を吹き込まれたとき〔強調は引用者による〕——そのときこそ、われわれは思考と感受について何ほどかのことを語りうるだろう。」<sup>99</sup>こうした見解は1784年の『イデー』*Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* 第1部においても変わることはない。そこでは第3巻・第2章の冒頭で、「不滅のハラー<sup>100</sup>」による動物身体<sup>101</sup>の3つの生理的力(繊維の弾性、筋肉の刺激感性性、神経の感覺性)の正確な区別は、反駁できないものであり続けているのみならず、人間身体において「生理学的魂論」(physiologischen Seelenlehre)へ応用されることで最も豊かな成果を生み出すであろうと予言される。また、翌年刊行の第2部第7巻・第1章において人間身体<sup>102</sup>の多様性について述べた「ビュフォン『博物誌』への序文」——本論第2章に挙げた箇所——を引用し、一人一人の人間は最終的には一つの世界であつて、外観は相互に似通っていても内部は各自独自の存在であると論じられる。これが『神』第5対話における言及と直結するものであることは明らかなだろう。しかしここでも「解剖学者の目がそれほど数えきれない差異を見出すのであれば、(……)不可視の諸力のうちにはさらにどれほどの差異が宿っていることだろう!」<sup>102</sup>というように、可視的な形態から不可視の力へと力点が移動している。これは「殻が彼を押しとどめる。彼は核にいたることはない。/世界の、外側で動いているものを知りながら、/ひそかにすべてを動かしている内なる力を

知ることはない」(V.100-102, S.94, [S.43]) という「人間の美德の過ち」の歎きと明確な対照をなしている。結局のところ、発想あるいはまなざしの方向がハラーとヘルダーにおいては逆なのではないか。ハラーはあくまで外から内へ向かおうとし、そこに限界ないし障害を見出す。ヘルダーはハラーが無数の実験による観察と測定において、ある法則的な関連として間接的・仮説的に提示する「力」を発想の出発点としている。そこにはある直接性が想定されている。ハラーにおいて「魂への直接的な表象」を担う感覚性が、ヘルダーにおける「力」のモデルだったのではないか。ヘルダーが繰り返し、生理学と心理学ないし魂論が結びつかねばならないと強調するのも、そのためかもしれない。最近ある論者が、本論第2章で取り上げたビュフォンの後成説批判に登場する「拘束のうちにある力」を、『神』第2対話における生体の力をめぐる議論と結びつけ、「有機的生起の全体に神を導きいれようとする、ハラーの一見すると古臭い、自然神学に根差した要請は、『神』において」物質という古くからの概念が時代遅れになったと宣言されることによって実現された<sup>103</sup>と論じているが、刺激的な主張であり、慎重な検討に値するものと思われる。

『詩と真実』*Dichtung und Wahrheit* (1811-1833) のなかで、幼年期の愛読書として、そして学生時代の会食の席でリンネやビュフォンとならんでその名が非常な敬意をもって挙げられるのを耳にしたとハラーに言及するゲーテ (1749-1832) は、晩年の詩「言うまでもなく」*Allerdings* (1820) において、ハラーを「俗物」と呼び、「自然の内部に、/被造物の精神は踏み込まない」と引用した後で、自己の自然観を明確に対置する：「何度でも聞かせてほしい、/自然はすべてを惜しみなく与えてくれる、/自然には核もなければ/殻もない、/自然はいちどきにすべてである、と。/なによりも、自分自身を調べてみるがいい/自分が核なのか、それとも殻であるのか、と」<sup>106</sup>。ゲーテにこう語らせるもの、そしてハラーとの決定的な相違に関しては、前述した G. ベーメの論考を参照されたいが<sup>107</sup>、ハラーの営みそのものの可能性と限界を最も明確に見通し、自覚的に継承したのはヘルダーであったと言えるだろう。ハラーを批判したレッシングの『ラオコオン』に対し、最も根底的な

批判を加えたのがまさにヘルダーであったこと<sup>108</sup>、これは興味深い事実である。

ハラーの受容史において最後に挙げられねばならないのは、残した仕事を通してというより、むしろその実践活動をさまざまな形で受け継いだ一群の科学者兼文学者たちである。彼ら、すなわちリヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムたちもまた、自らの営みの中でつねに限界／境界を意識し、生と死を執拗に問題とし続けた。そして彼らのテキストには、ハラーの詩において「精神の疲弊」として定着されたものがさまざまな形姿をとって言語化されている。近代ドイツ語圏における〈実験者の文学〉の系譜が描かれるとしたら、その端緒に置かれるべきは疑いもなくハラーなのである。

#### ■ 註

- 1 Siegrist, Christoph: Albrecht von Haller. In: *Literaturlexikon*. Hrsg. von Walter Killy. Gütersloh (Bertelsmann Lexikon Verlag) 1988-1993, Bd.4 (1989). S.484.
- 2 この言葉は伝統的に「教訓詩」と訳されてきたが、本論者では「教示詩」という訳語を用いる。それは次の理由による。第一に「教訓」という言葉は道徳的教訓を連想させるが、このジャンルの詩において必ずしも道徳が問題となるわけではない。第二に、18世紀ドイツにおいて、このジャンルの特性として知識や思考の過程を「示す」ことが重視されていた（この点のはちに論じる）ことを明示するためである。古代ギリシアから20世紀までのこのジャンルの歴史を叙述したものとして：Kühlmann, Wilhelm: *Lehrdichtung*. In: *Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft*. Bd.2. Berlin (de Gruyter) 2000, S.393-397.
- 3 以下の伝記的事項に関しては、上記の Siegrist の叙述 (S.480-483) 以外に、主として次のものを参照した：Boschung, Urs: *Lebenslauf*. In: *Albrecht von Haller. Leben-Werk-Epoche*. Hrsg. von Hubert Steinke, Urs Boschung und Wolfgang Proß. 2. Auflage. Göttingen (Wallstein) 2009, S.15-82; Müller-Sievers, Helmut: *Ein Wissenschaftler und Dichter*. In: *Eine neue Geschichte der deutschen Literatur*. Hrsg. von David E. Wellbery, Judith Ryan, Hans Ulrich Gumbrecht, Anton Kaes, Joseph Leo Koerner. Berlin (Berlin University Press) 2007, S.447-453 [Originaltitel: *A New History of German Literature*. Harvard University Press 2004, pp.345-350].

- 4 この小説は抄訳がある。「ウーゾング」 轡田収・木村高明訳 『ユートピア旅行記叢書 第8巻』、岩波書店、1999年、225-316頁。
- 5 Haller, Albrecht von: *Versuch Schweizerischer Gedichte*. 11., vermehrte und verbesserte Auflage. Bern 1777 [die photomechanische Reproduktion: Zürich (Olms) 2006].
- 6 詩の引用は上記第11版により、重要な異同がある場合はそのつど言及する。引用の次に行数とページ数を付す。なお、容易に入手可能な選詩集としてレクラム文庫版 (Haller, Albrecht von: *Die Alpen und andere Gedichte*. Auswahl und Nachwort von Adalbert Elschenbroich. Stuttgart (Reclam) 1965) があるが、これは1882年のHirzel版を底本としている。参照の便宜を図るため、レクラム版にも収録されている場合は[ ]のなかにそのページ数も付す。なお、この詩には邦訳がある：「アルプスの山々」 宮下啓三訳、スイス文学研究会編『スイス詩集』、早稲田大学出版部、1980年、126-155頁。
- 7 Ischer, Anna: *Albrecht von Haller und das klassische Altertum*. Bern (Paul Haupt) 1928, S.84-110; Helbling, Josef: *Albrecht von Haller als Dichter*. Bern (Herbert Lang) 1970, S.1-11.
- 8 レクラム文庫に抄録されている (Brockes, Barthold Heinrich: *Irdisches Vergnügen in Gott. Naturlyrik und Lebrdichtung*. Ausgewählt und herausgegeben von Hans-Georg Kemper. Stuttgart (Reclam) 1999)。
- 9 自然神学的文学とブロッケスについては次の叙述がきわめて示唆に富む：エンゲルハルト・ヴァイグル『啓蒙の都市周遊』 三島憲一・宮田敦子訳、岩波書店、1997年、111-121頁。
- 10 ここにバロック・アレゴリーとの関連を見る研究も多い。ブロッケス、バロックとハラーの関係を論じた代表的な論考として：Guthke, Karl S.: Haller, Brockes und die Barocklyrik. In: *Literarisches Leben im achtzehnten Jahrhundert in Deutschland und in der Schweiz*. München (Franke) 1975, S.157-173.
- 11 Täuschung とは、この文脈では〈まるで眼前にあるかのような錯覚を起こさせる作用〉を意味する。
- 12 Lessing, Gotthold Ephraim: *Werke*. 3Bde. Nach den Ausgaben letzter Hand. Mit entstehungsgeschichtlichen Kommentaren und Otto Manns revidierten Anmerkungen von Peter-Andre Alt. 3.Auflage. München (Artemis & Winkler) 1995, Bd.2., S.99f. 邦訳：『ラオコオン』 斎藤栄治訳、岩波文庫、1970年、214-215頁。
- 13 ハラーと Lessing の相互批判に関する詳細な研究として Guthke, Karl S.: Haller und Lessing: Einsames Zwiegespräch. In: *Literarisches Leben*. a.a.O., S.118-152.

- 14 Haller, Albrecht von: *Tagebuch seiner Beobachtungen über Schriftsteller und über sich selbst*. Hrsg. von Johann Georg Heinzmann. Bern 1787 [die photomechanische Reproduktion: Frankfurt a.M. (Athenäum) 1971], S.277.
- 15 啓蒙期におけるこのジャンルに関する研究としては : Siegrist, Christoph: *Das Lebrgedicht der Aufklärung*. Stuttgart (Metzler) 1974; Jäger, Hans-Wolf: *Lehrdichtung*. In: *Deutsche Aufklärung bis zur Französischen Revolution 1680-1789*. [Hansers Sozialgeschichte der deutschen Literatur vom 16. Jahrhundert bis zur Gegenwart. Bd.3] Hrsg. von Rolf Grimminger. 2., durchgesehene Auflage. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1984, S.500-544.
- 16 Jäger, a.a.O., S.500.
- 17 具体的な諸技法については : Siegrist, a.a.O., S. 89-174.
- 18 Haller, A.von: *Versuch Schweizerischer Gedichte*. 4., vermehrte und veränderte Auflage. Göttingen 1748, S.6f. なお、2008 年のハラー生誕 300 年を前に、ベルン大学医学史研究所とベルン市立図書館が中心となって 2003 年より進められてきた研究プロジェクト「アルブレヒト・フォン・ハラーと 18 世紀の学者共和国」“Albrecht von Haller und die Gelehrtenrepublik des 18. Jahrhunderts” の研究成果がネットで公開されており (<http://www.haller.unibe.ch/> 2010 年 12 月 16 日最終閲覧)、文献学的精査に基づく最新の研究成果を参照することができる。また、Haller-Texte online (<http://www.haller.unibe.ch/hallerol.html>) からは、電子化された大量のテキストの参照とダウンロードが可能である。この『スイス詩の試み』第 4 版もここからダウンロードしたものである。
- 19 声調・パースペクティブの転換を伴う言説の動的開示、という点から、これまでたびたび論じられてきたヘルダーリンの詩との類似性について再考することも可能だろう。
- 20 Haller, Albrecht von: *Vorrede zum Ersten Theil der allgemeinen Historie der Natur*. (1750) In: *Sammlung kleiner Hallerischer Schriften*. Zweite, verbesserte und vermehrte Auflage. Erster Theil. Bern (Emanuel Haller) 1772 [Reprints from the collection of the University of Michigan Library], S.51.
- 21 Ebenda, S.57f.
- 22 G. ベーメ「自然には核もなければ殻もない——ゲーテの自然観察の方法論——」宮田眞治訳『思想』第 906 号、1999 年 12 月、44 頁。
- 23 同誌同頁。
- 24 「理性、迷信、および不信仰についての思索」*Gedanken über Vernunft, Aberglauben und*

- Unglauben* (1729).
- 25 Toellner, Richard: *Albrecht von Haller. Über die Einheit im Denken des letzten Universalgelehrten*. Wiebbaden (Franz Steiner) 1971, S.160.
- 26 Ebenda, S.160f.
- 27 本論文の冒頭に挙げたのは、この論文の初出ラテン語版のタイトルである。ここには本論文執筆にあたり参照したドイツ語版の表題を挙げる。1752 年 4 月 22 日にゲッティンゲン王立学術協会でおこなわれた講演であると冒頭に注記がある。従って公刊はその翌年ということになる。出典は：*Sammlung kleiner Hallerischer Schriften*. Zweite, verbesserte und vermehrte Auflage. Zweyter Theil. Bern (Emanuel Haller) 1772 [Reprints from the collection of the University of Michigan Library], S.1-103. この論文について、今回参照した研究として Janzen, Jörg: Theorien der Irritabilität und Sensibilität. In: *Ergänzungsband zu Schellings gesammelte Werke. Bd.5-9*. Stuttgart (Frommann-Holzboog) 1994, S.375-498; Steinke, Hubert: Anatomie und Physiologie. In: *Albrecht von Haller. Lebenswerk-Epoche*, a.a.O., S.226-254; Manzolini, Renato G.: Die Entdeckung der Reizbarkeit. Haller als Anatom und Physiologe. In: *Albrecht von Haller im Göttingen der Aufklärung*. Hrsg. von Norbert Elsner und Nicolaas A. Rupke. Göttingen (Wallstein) 2009, S.283-305; 松永澄夫「二つの生命と二つの生命特性——ビシャの生命思想とその論理」(特に「D. 二つの生命特性」の章)『哲学史を読むⅡ』東信堂、2008 年、119-128 頁; 金森修「刺激感応性——ある生理学的概念の運命——」『科学的思考の考古学』人文書院、2004 年、209-229 頁。
- 28 金森、同書、212-213 頁。
- 29 Manzolli, S.287.
- 30 Haller, a.a.O., S.7.
- 31 Ebenda, S.44.
- 32 Ebenda, S.59.
- 33 Ebenda, S.58.
- 34 Ebenda.
- 35 Ebenda, S.59.
- 36 Toellner, a.a.O., S.179
- 37 刺激感応性を持つ組織の場合は、この同じ組織が刺激を〈知覚〉し、かつそれに〈反応〉するのに対し、感覚性を持つ神経繊維においては、〈知覚〉するのは魂であり、

かつそれに〈反応〉するのも、全く別の生体組織になるということから、〈魂〉の関与という問題の重要性を指摘したのは、松永澄夫である：松永、前掲書、123-126 頁。

- 38 Haller, Albert von: *Primae lineae physiologiae in usum praelectionum academicarum*. Göttingen 1781 (3.Auflage), p.222. 英訳版も参照した： *First Lines of Physiology*. Translated from the correct Latin edition. Printed under the inspection of William Cullen, M.D. Edinburgh 1786 [A Reprint with a new introduction by Lester S. King, M.D. Two volumes in one. New York and London (Johnson Reprint Corporation) 1966], Vol.2. p.33. 以下、原版と英訳版のページ数を併記する。
- 39 Ebenda, p.231, Vol.2. p.46. この箇所に注目した研究として：Toellner, a.a.O., S.90-92.
- 40 この問題について参照した研究は：Monti, Maria Teresa: Embryologie. In: *Albrecht von Haller. Leben-Werk-Epoche.*, a.a.O., S.255-273; Janzen, Jörg: Theorien der Reproduktion und Regeneration. In: *Ergänzungsband zu Schellings gesammelte Werke. Bd.5-9.*, a.a.O., S.598-623.
- 41 Haller: *Sammlung kleiner Hallerischer Schriften. Erster Theil.*, a.a.O., S.103.
- 42 Ebenda, S.103f.
- 43 Ebenda, S.114.
- 44 Ebenda.
- 45 Ebenda, S.117. ビュフォン独訳の序文に注目し、論文中に引用した箇所の重要性を指摘した研究として：Proß, Wolfgang: Haller und Aufklärung. In: *Albrecht von Haller. Leben-Werk-Epoche.*, a.a.O., S.415-458 (bes. S.446-448, 452-454).
- 46 *Primae lineae*, a.a.O., p.389, *First Lines*, Vol.2. p.248.
- 47 ハラーの妻の名は Marianne (マリアンネ) であるが、表題では Mariane (マリアーネ) と記されている。以下マリアンネと表記する。
- 48 原著では、この頁から次々頁までには頁数が欠けており、以後の頁数表示は実際とは異なっている。ここでは便宜上、226 頁の次の頁という意味で 227 頁と表記する。以後の詩に関しては、原著の頁数表記に従う。
- 49 註 46 と同じ。
- 50 シラーは、1795 年から翌年にかけて書かれた『素朴文学と情感文学について』 *Über naive und sentimentalische Dichtung* (Schiller, Friedrich: *Sämtliche Werke*. 5 Bde. Hrsg. von Peter-Andé Alt, Albert Meier und Wolfgang Riedel. München (Hanser) 2004, Bd.5. S.694-780.) において、ハラーを「自然と理想が悲哀の対象となり、前者が失われたものの、後者が到達しえないものとして提示される」(S.728) 哀歌的 (elegisch) 詩人のう



ちに位置づけ、彼らが表現するものは「詩人の反省的知性が対象から作り出すもの」(S.731)であるとする。そして「哀悼詩」のこの箇所を引用し、ここでは感情そのものではなく「感情についての思考」(S.732)が伝達されており、それゆえ読み手を感動させる力が弱まっていると論じている。邦訳：「素朴文学と情感文学について」(『シラー 美学芸術学論集』所収) 石原達二訳、富山房、1977 年、225-348 頁。

- 51 グートウケの推定は以下の通り：ハラー自身のチェックの入ったツィンマーマンによるハラー伝 (1755) によると、最初の自然描写 (8 行ないし 9 行まで) はゲッティンゲン移住以前のベルン時代に成立していた。ヴェアホーフ Werhof によるハラー宛の書簡 (未刊行) より、クリスト Christ という学生の死 (1737) がこの詩の主要部分を構想するきっかけになったのであろうと推定される。冒頭の自然描写が 1738 年の段階ですでに接合されたかは確定できない。第 10 行 (「〈永遠〉の心像であれ!」) がブリッジとして挿入された可能性はある。75 行から 84 行までの草稿が、1741 年にヴェアホーフよりハラーに届いた書簡の裏面に書かれている。したがってこの部分及びそれに続く部分も、41 年以後に成立した蓋然性は高い。ヴェアホーフの書簡でこの詩が再び言及されるのは 1742 年においてである。そこには細部に関する批評的コメントが記されており、遅くとも 42 年 10 月にはほぼ完成稿が成立していたと推定される。「最後の詩節 [複数形] も残されたほうがいいとわたしは思う」という記述から、最後の 8 行も遅くとも 1742 年段階で成立していたと推定される。しかしこの部分は 1748 年の第 4 版にはじめて追加された。Guthke, Karl S.: Hallers „Ode über die Ewigkeit“: Veranlassung und Entstehung. In: *Literarisches Leben im achtzehnten Jahrhundert*, a.a.O., S.301-311.
- 52 原著を参照することができなかったため、次の研究書からの引用による：Helbling, a.a.O., S.83.
- 53 第 4 版でもオードと呼ばれている (S.223)。
- 54 この詩に関して参照した論考として、上記 Guthke (1975), Helbling 以外のものとして：Guthke, Karl S.: Der Sinn der Frage ohne Antwort. Zu Hallers Ode über die Ewigkeit. In: *Aufklärung und Sturm und Drang. [Gedichte und Interpretationen. Bd.2]* Hrsg. von Karl Richter. Stuttgart (Reclam) 1983, S.72-86; Achermann, Erick: Dichtung. In: *Albrecht von Haller. Leben-Werk-Epoche.*, a.a.O., S.121-155 [bes. S.140-144.]; Barner, Wilfried: Hallers Dichtung. In: *Albrecht von Haller im Göttingen der Aufklärung.*, a.a.O., S.381-418 [bes. S.400-404.] なお、この詩篇の初出ヴァージョンは、上記： *Gedichte und Interpretationen. Bd.2*, S.67-71 に収録されてい

る。

- 55 この節前半部は第4版で全面的に書き換えられた。初出は以下の通り：「今日はまだ、いまの私のように、この同じ舞台で／この世という芝居を熱心に見物していたのだ、彼は。／最期の時の鐘が鳴る、と、たちどころに／すべては無だ。現実にはそんなのだ、かつてはそう思われたただけだったが。」
- 56 原語は“Unding”。『哲学歴史辞典』によれば、「特に18世紀において、この概念は世界と事物の非－存在を表す概念となった。そこでは、世界がそこから生成し、またそこへ消滅していく根底としての無（カオス）という意味と、単なる非－現実存在という意味の間での（その境界はあいまいなことが多い）揺らぎがみられる。」として、この箇所が引用されている（B. Milz: Unding. In: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. 13 Bde. Hrsg. von Joachim Ritter, Karlfried Gründer und Gottfried Gabriel. Basel (Schwabe) 1971-2007, Bd.11(2001). col.135-137.）
- 57 この一行はハラー没年刊行の第11版においてはじめて挿入された。
- 58 この箇所には第4版から次のような註が付されている：「胎児の耳を包むこの膜についてはウプサラの論考で描写しておいた [ウプサラ王立科学協会会報 1742年]」。
- 59 Helbling, Josef: Nachwort. In: Haller, Albrecht von: *Versuch schweizerischer Gedichte*. Neunte, rechtmäßige, vermehrte und veränderte Auflage. Göttingen (Bandenhoeck) 1762 [Nachdruck: Bern (Lang) 1969], S.347.
- 60 Ebenda.
- 61 Ebenda.
- 62 Ebenda, S.347f.
- 63 Ebenda, S.348.
- 64 Ebenda, S.347.
- 65 Ebenda, S.349.
- 66 Ebenda.
- 67 Ebenda.
- 68 Ebenda, S.350.
- 69 Ebenda, S.349.
- 70 Guthke (1983), S.74. ただ、この無限の広がりやを「近代的」と限定してしまうのは不正確であろう。この二つの永遠概念には、aeternitas/sempernitatis という伝統的な区別が反響しているように思われる。

- 71 Ebenda, S.77.
- 72 Ebenda, S.78.
- 73 Ebenda, S.79.
- 74 Ebenda, S.80.
- 75 Ebenda, S.81.
- 76 Ebenda, S.83f.
- 77 Ebenda, S.85.
- 78 Ebenda.
- 79 Ebenda, S.84f.
- 80 この問題に関してまず参照されるべき研究として：Shings, Hans-Jürgen: *Melancholie und Aufklärung. Melancholiker und ihre Kritiker in Erfahrungsseelenkunde und Literatur des 18. Jahrhunderts*. Stuttgart (Metzler) 1977.
- 81 *Kants Werke. Akademie-Textausgabe*. Berlin (de Gruyter) 1968, Bd.1. S.239. 引用は、カント全集第 2 巻『前批判期論集 II』(岩波書店、2000 年) 所収の宮武昭訳 (30 頁) による。
- 82 Ebenda, S.314. 邦訳 114 頁 (訳文を一部変更した)。
- 83 Ebenda, S.321. 邦訳 122 頁。
- 84 Ebenda, S.365. 邦訳 168 頁。
- 85 *Kants Werke*. Bd.2. S.40. 邦訳 (加藤泰史訳) 同書 289 頁。
- 86 邦訳者加藤泰史氏の解説より引用 (同書 541 頁)。
- 87 Ebenda, S.210. 引用の訳文は：邦訳 (久保光志訳) 同書 327 頁、による。
- 88 A613B641. 引用の訳文は：『純粹理性批判』中巻、原佑訳・渡辺二郎補訂、平凡社、2005 年、429 頁、による。
- 89 Herder, Johann Gottfried: *Schriften zu Philosophie, Literatur, Kunst und Altertum 1774-1787*. [Werke.10Bde. Bd.4] Herg. von Jürgen Brummack und Martin Bollacher. Frankfurt a.M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1994, S.768.
- 90 Ebenda.
- 91 Ebenda, S.761.
- 92 Ebenda.
- 93 Ebenda, S.762.
- 94 Ebenda, S.778.
- 95 Ebenda.

- 96 Ebenda.
- 97 Herder, Johann Gottfried: *Frühe Schriften 1764-1772*. [Werke. 10 Bde. Bd. 1] Hrsg. von Ulrich Gaier. Frankfurt a.M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1985, S. 476.
- 98 Herder, Johann Gottfried: *Schriften zu Philosophie, Literatur, Kunst und Altertum 1774-1787*, a.a.O., S. 331.
- 99 Ebenda, S. 340.
- 100 Herder, Johann Gottfried: *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*. [Werke. 10 Bde. Bd. 6] Hrsg. von Martin Bollacher. Frankfurt a.M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1989, S. 86.  
また、ハラーの生理学がヘルダーに与えた影響について：小田部胤久「ヘルダーの自然哲学——ライプニッツの受容と批判に即して——」、伊坂青司・長嶋隆・松山寿一編『ドイツ観念論と自然哲学』、創風社、1994年、171-197頁。この論文には「機械的仕組みによる決定からの解放過程という一元的観点から魂を備えた有機体を捉え、この解放の度合いの差異を説明するために有機体を〈線維〉〈筋肉〉〈神経組織〉という重層構造として捉えるのである」(179頁)という卓抜な定式化がある。また、この構造を支配する法則が、それぞれ〈弾性〉-〈刺激感应性〉[原論文においては「興発性」]-〈感覚性〉[原論文においては「感受性」]であると確認されている(178頁)。
- 101 Ebenda.
- 102 Ebenda, S. 252.
- 103 Proß, Wolfgang: Haller und Aufklärung. In: *Albrecht von Haller. Leben-Werk-Epoche*, a.a.O., S. 454.
- 104 Goethe, Johann Wolfgang von: *Werke*. Hamburger Ausgabe. 14 Bde. Hrsg. von Erich Trunz. 10., neubearbeitete Auflage. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1982, Bd. 9. S. 79.  
邦訳：『詩と真実』第1部、山崎章甫訳、岩波文庫、1997年、134頁。
- 105 Ebenda, S. 256. 邦訳：『詩と真実』第2部、山崎章甫訳、岩波文庫、1997年、81頁。
- 106 Goethe: *Werke*. Bd. 1. S. 359.
- 107 註 22 参照。
- 108 『批判論叢』第1集 *Das erste kritische Wäldchen* (1769) において、言語記号による表現の特質を、その継起性においてではなく、読み手の〈魂〉に働きかける〈力〉の作用に見出すことを基本として、その批判はなされる。(Herder, Johann Friedrich: *Das erste kritische Wäldchen*. In: *Schriften zur Ästhetik und Literatur 1767-1781*. [Werke. 10 Bde. Bd. 2] Hrsg. von Gunter E. Grimm. Frankfurt a.M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1993, S. 57-245.)

この批判の核心についての論考として：小田部胤久「記号結合術としての芸術——レッシングと 18 世紀記号論的美学——」、谷川渥編『記号の劇場』、昭和堂、1988 年、113-142 頁（特に 136-138 頁）。

- 109 この領域で筆者が発表したものとして：宮田眞治「〈創造する精神の構成論〉としての〈実験術〉——ノヴァーリスにおける〈諸科学のポエジー化〉の問題——」、『ドイツ観念論と自然哲学』（前掲）、229-260 頁。同「変容の舞台・舞台の変容——ノヴァーリス『ザイスの弟子たち』における自然と言語——」、『モルフォロギア』第 17 号、1995 年、83-111 頁。同「〈実験〉のゆくえ——A. v. アルニム、J. W. リッターの場合——」、『シェリング年報』第 15 号、2007 年、52-64 頁。同「実験者の〈文学〉——リヒテンベルクの場合——」、『文化交流研究』第 21 号、2008 年、25-36 頁。

（みやた・しんじ 東京大学大学院人文社会系研究科准教授）